インド論理学派における関係論
—限定・被限定関係から自相関係へ—

山　本　和　彦

1　問題の所在

インド論理学の諸概念は，複雑で専門用語化している。特に新論理学（Navyanyāya）の用語はそうであり，特殊な意味の理解が前提とされる。しかし，それら論理学用語を存在論・認識論・論理学という3つの領域ごとに整理すれば，かなり理解し易くなるのではないかと思われるのである。

それは関係論についても当てはまるのではないだろうか。存在論とは句義（padārtha）の問題であり，関係（sambandha）は実在するのかどうかということが，そして実在するとすればどの範疇に入るのかということが問題になる。論理学派（Naiyāyika）の開祖であるアクシャパーダ・ガウタマ（Akṣapāda Gautama, ca. AD 50-150）の『ニヤーヤ・スートラ』（*Nyāyasūtra*, ca. AD 250-350）において，結合（saṃyoga）は徳（guṇa）のひとつであるとは明言されていないが[①]，すでにヴァイシェーシカ学派（Vaiśeṣika）の開祖であるカナーダ（Kaṇāda, ca. BC 150-AD 50）の『ヴァイシェーシカ・スートラ』（*Vaiśeṣikasūtra*, ca. AD 100）のなかで，結合は徳のひとつとして考えられていた[②]。内属（samavāya）は，『ヴァイシェーシカ・スートラ』では句義（padārtha）のひとつだとは述べられていないが[③]，その註釈書であるプラシャスタパーダ（Praśastapāda, ca. AD 550-600）の『パダ・アルタ・ダルマ・サングラハ』（*Padārthadharmasaṃgraha*），別名『プラシャスタパーダ・バーシャ』（*Praśastapādabhāṣya*）では，冒頭部分で内属は6句義のひとつであると述べられている[④]。『ニヤーヤ・スートラ』では内属に関する言及は一ヵ所しかないが[⑤]，註釈者であるヴァーツヤーヤナ（Vātsyāyana, ca. AD 400-450）は内

属を句義のひとつであると見なしていた。[6]『ヴァイシェーシカ・スートラ』や『ニヤーヤ・スートラ』では結合と内属とは存在論の範疇で考えられていた関係であった。

認識論とは，知覚（pratyakṣa）に関する問題であり，感官（indriya）と対象（artha）との接触（sannikarṣa）が問題となる。『ヴァイシェーシカ・スートラ』[7]や『ニヤーヤ・スートラ』[8]では，接触とは感官（indriya）と対象（artha）との関係であり，知覚（pratyakṣa）定義中での関係である。そこでは接触が分類されることはなかったけれども，ウッディヨータカラ（Uddyotakara, ca. AD 550-610）によって6種類に分類されるようになった。それらの中には，結合と内属も含まれている。また，内属の認識手段についても認識論上の問題である。論理学派は，内属は知覚（pratyakṣa）によって認識されると言うが，ヴァイシェーシカ学派は推理（anumāna）によって認識されると主張する。[9]

論理学は抽象概念の世界をその領域とする。そこでの関係として，自相関係（svarūpasambandha）と同一関係（tādātmya）を挙げることができる。自相関係は接触のひとつである限定・被限定関係（viśeṣaṇaviśeṣyabhāva）から発展し，親子関係（pitṛputrabhāva），師弟関係（guruśiṣyabhāva），対象・知識関係（viṣayaviṣayibhava），関係・関係所有者関係（sambandhisambandhabhāva），因果関係（kāryakāraṇabhāva）などのような論理的な関係であると見なされている。親子関係が自相関係であるという考えは以下のように説明される。たとえば，地面と瓶との物理的な結合であれば，地面と瓶との関係と言えるが，親子関係はそのような物理的結合ではなく，論理的に構想された関係であり，父親と呼ばれうる性質と息子と呼ばれうる性質との関係であり，父親性（pitṛtā）と息子性（putratā）との関係である。父親にも息子にも親子関係が属性（dharma）として存在する。父親と親子関係，息子と親子関係には内属関係がある。その内属と基体である父親との関係は，結合でも内属でもないので自相関係である。同様にその内属と基体である息子との関係も自相関係である。親子関係は父親と息子に共通して存在する関係であり，自相関係

もまた父親と息子に共通して存在する関係なので親子関係は自相関係であると言われる。[10] ガンゲーシャ（Gaṅgeśa, ca. AD 1325）の定義に従えば，自相関係はそれぞれ父親と息子，師と弟子，対象と知識，関係と関係を持つ者，原因と結果との両方に存在することになる。新論理学派が自相関係を想定する理由は，無限遡及（anavasthā）を避けるためである。父親と息子には関係Ａがあり，父親と関係Ａには関係Ｂがあり，関係Ａと関係Ｂには関係Ｃがあり，さらに関係Ｂと関係Ｃには関係Ｄがあり，というように無限に関係が続いてしまうことを防ぐためには，それ自身で関係が完結する関係が必要となる。それが自相関係である。父親と息子には親子関係があり，父親と親子関係には内属があり，父親と内属には自相関係がある。そして，もはやこれ以上の関係を想定することはできない。自相関係とは論理的に要請された関係である。[11]

インド新論理学派は，以上述べた諸関係を結合，[12] 内属，[13] 自相関係，[14] 同一関係の[15] 4種類の関係（sambandha）にまとめている。[16]

本稿では，ウッディヨータカラの限定・被限定関係から，ガンゲーシャによる定義に至るまでの自相関係を歴史的側面から考察する。[17]

2　ウッディヨータカラの接触論

自相関係（svarūpasambandha）の起源は，ウッディヨータカラの限定・被限定関係（viśeṣaṇaviśeṣyabhāva）に求めることができる。彼は『ニヤーヤ・ヴァールティカ』（*Nyāyavārttika*）のなかで，感官（indriya）と対象（artha）との接触（sannikarṣa）を，次の6種類に分ける。[18]

(1)結合（saṃyoga）。瓶を知覚する場合，眼と瓶は両方とも実体（dravya）であり，眼と瓶との接触は結合である。[19]

(2)結合しているものへの内属（saṃyuktasamavāya）。瓶の色を知覚する場合，眼は色を内属している瓶を通して色を知覚するので，眼と瓶との結合，そして瓶と色との内属という複合的関係が眼と色との接触であり，結合している

もの（瓶）への内属と呼ばれる。[20]

(3)結合しているものに（おいて）内属しているものへの内属（saṃyukta-samavetasamavāya）。瓶の色の普遍を知覚する場合，眼は普遍を内属している色，そしてその色を内属している瓶を通して普遍を知覚するので，眼と瓶との結合，瓶と色との内属，そして色と普遍との内属という複合的関係が眼と普遍との接触であり，結合しているもの（瓶）において内属しているもの（色）における内属と呼ばれる。[21]

(4)内属（samavāya）。音を知覚する場合，徳の所有者（guṇin）である耳と徳（guṇa）のひとつである音との接触は内属である。[22]

(5)内属しているものへの内属（samavetasamavāya）。音の普遍を知覚する場合，耳は普遍を内属している音を通して普遍を知覚するので，耳と音との内属，そして音と普遍との内属という複合的関係が耳と普遍との接触であり，内属しているもの（音）における内属と呼ばれる。[23]

(6)限定・被限定関係（viśeṣaṇaviśeṣyabhāva）。内属，もしくは非存在を知覚する場合，内属と感官との接触，そして非存在と感官との接触が限定・被限定関係であるとウッディヨータカラは言う。[24]この関係について彼の言及は少ないが，例を挙げて説明すれば次のようになる。「青い蓮華」という場合，「青色」は「蓮華」に内属している。「青色」は内属によって「蓮華」を限定している。「蓮華」は内属によって「青色」に限定されている。「蓮華における青色の内属」を知覚する場合，内属と感官との接触は限定・被限定関係である。「地面に瓶がない」もしくは「地面に瓶の非存在がある」という場合，「地面」は「瓶の非存在」を限定している。「瓶の非存在」は「地面」に限定されている。「地面に限定された瓶の非存在」を知覚する場合，非存在と感官との接触は限定・被限定関係である。このように自相関係は認識論の関係である限定・被限定関係として出発したのである。

3　ジャヤンタ・バッタの限定・被限定関係

ジャヤンタ・バッタ（Jayanta Bhaṭṭa, ca. AD 840-900）[25]は非存在を知覚する際の限定・被限定関係について『ニヤーヤ・マンジャリー』（*Nyāyamañjarī*）のなかで詳細に論じている[26]。ここではジャヤンタ以前には見られない独自の見解を3点見ることができる。第一に，限定・被限定関係は別の関係を想定する必要がないという点である。たとえば，「デーヴァダッタは杖を持つ」（daṇḍī devadattaḥ）という知覚の場合，限定・被限定関係以外にさらに別の関係を必要とする，と対論者は言う。知覚対象である「杖に限定されているデーヴァダッタ」と感官である眼との接触が限定・被限定関係であるとして，「杖」と「デーヴァダッタ」には限定・被限定関係以外に根本的な関係である結合がある。この対論者の説に対して，ジャヤンタは次のように言う。まず，限定・被限定関係は非存在の関係であり，存在の関係ではない。もし，存在が例になるとすれば，たとえば，杖が足の下，もしくは頭の上にある場合，杖とデーヴァダッタには結合（saṃyoga）はあるけれども，「杖を持つ」という知覚は起こらない。したがって，「杖を持つ」という例ではなく，「杖を持たない」という例でなければならない。この場合の知覚は「デーヴァダッタは杖を持たない」つまり「デーヴァダッタは杖の非存在を持つ」であり，非存在での例である。「杖の非存在」と「デーヴァダッタ」との関係は結合ではなく，限定・被限定関係であり，別の関係を想定する必要はない。また，内属の例として，「その蓮華は青い」（nīlam utpalam）という知覚の場合，感官である眼と知覚対象である「蓮華における青色の内属」との間には限定・被限定関係があるが，さらに蓮華と青色との間には内属があるので，限定・被限定関係は内属という別の関係を想定しなければならないことになる[27]。この対論者の考えに対してジャヤンタは，次のように反論する。「その蓮華は青い」という場合，蓮華と青色との間に内属があるとしても，その内属こそが限定者であり，この内属と別の関係を想定しなくても限定・被限定関係は成立する。内属こそが限定・被限定関係である。したがって，限定・被限定

関係は別の関係を必要としない自立的な関係である。

第二に，限定者（viśeṣaṇa）と被限定者（viśeṣya）とは交代可能な相対的なものであるという点である。たとえば，「この人は青い杖を持つ」（nīla-daṇḍavān puruṣaḥ）[28]という場合，人が青い杖を限定していると考えれば，「この人」は限定者，「青い杖」は被限定者になる。逆に青い杖が人を限定していると考えれば，「青い杖」は限定者，「この人」は被限定者になる。話し手の意図（puruṣeccha）に従って，限定者は「青い杖」にも「この人」にもどちらにもなり得る。同様に被限定者は「この人」にも「青い杖」にもなり得る。これらの決定は，人間によって構想されたもの（kālpanika）であり，本来的に備わっている実有存在（vastudharma）ではない[29]。

第三に，限定・被限定関係は，(1)場所・(2)時間・(3)反存在（pratiyogin）の3つに限定される認識になるという点である。(1)「地面」は「瓶の非存在」が存在する場所（deśa）であり，「瓶の非存在」の限定者である。この場合，場所に限定された認識になる。(2)「行く」という行為（kriyā），「割られる」という行為の基体は時間（kāla）である。時間は行為の限定者であり，時間に限定された認識になる。(3)非存在を知覚する場合，必ず何かの非存在でなければならない。その何かが，その非存在に対する反存在（pratiyogin）と呼ばれる。「瓶の非存在」の反存在は，「瓶」である。この場合，反存在（存在しないものである瓶）に限定された認識になる。ジャヤンタはこれら3つの限定・被限定関係に対してテクニカルな名称を与えなかったが，場所・時間・反存在が限定者になると考えていた点は重要である。なぜなら，この考えはガンゲーシャ以降の新論理学派によって，「場所の限定関係」（daiśikaviśeṣaṇatā），「時間の限定関係」（kālikaviśeṣaṇatā），「非存在の限定関係」（abhāvīyaviśeṣanatā）と専門用語化されるからである[30]。ジャヤンタの年代がバーサルヴァニャとヴァーチャスパティに先行するとすれば，彼の時代には自相関係の認識論的な側面がほぼ考え尽くされていたことになる。

4　バーサルヴァニャの限定関係と被限定関係

バーサルヴァニャ（Bhāsarvajña, ca. AD 860-920）[31]は，『ニヤーヤ・サーラ』（*Nyāyasāra*），そしてその自註『ニヤーヤ・ブーシャナ』（*Nyāyabhūṣaṇa*）のなかで限定・被限定関係についてジャヤンタの考えをさらに発展させている。[32]ジャヤンタは「この人は青い杖を持つ」という表現のなかで，「この人」と「青い杖」のどちらが限定者になり，どちらが被限定者になるのかは，話者の意図次第であると考えたが，バーサルヴァニャはこの考えをさらに進めて，表現の違いで限定者と被限定者とは交代すると考える。「地面は瓶の非存在を持つ」（ghaṭaśūnyaṃ bhūtalam）という表現の場合，「地面」は被限定者であり，「瓶の非存在」は限定者である。「地面に瓶がない」（bhūtale ghaṭo nāsti）という表現の場合，「地面」は限定者であり，「瓶の非存在」が被限定者である。したがって，限定・被限定関係は大きく分けると，限定関係（viśeṣaṇabhāva）と被限定関係（viśeṣyabhāva）とのふたつに分かれると考えたのである。

そして，彼は限定・被限定関係を次の10種類に分ける。

(1)結合しているものに対する限定関係（saṃyuktaviśeṣaṇabhāva）。「地面は，瓶の非存在を持つ」（ghaṭaśūnyaṃ bhūtalam）という場合，眼は地面と結合があり，瓶の非存在は地面を限定している。したがって，結合しているもの（地面）に対する限定関係と呼ばれる。

(2)結合しているものに対する被限定関係（saṃyuktaviśeṣyabhāva）。「地面において，瓶はない」（bhūtale ghaṭo nāsti）という場合，眼は地面と結合があり，瓶の非存在は地面に限定されている。したがって，結合しているもの（地面）における被限定関係と呼ばれる。

(3)結合しているものに（おいて）内属しているものに対する限定関係（saṃyuktasamavetaviśeṣaṇabhāva）。「この接触は，熱さを持たない」（anuṣṇo 'yam sparśaḥ）という場合，皮膚と熱さを持たないものには結合があり，熱さを持たないものと熱さの非存在には内属があり，熱さの非存在はこの接触

を限定している。したがって，結合しているもの（接触）において，内属しているもの（熱の非存在）の限定関係と呼ばれる。

(4)結合しているものに（おいて）内属しているものに対する被限定関係（saṃyuktasamavetaviśeṣyabhāva）。「水との接触において，熱さはない」という場合，皮膚と水には結合があり，水と熱さの非存在には内属があり，熱さの非存在は水との接触に限定されている。したがって，結合しているもの（接触）において，内属しているもの（熱の非存在）の被限定関係と呼ばれる。

(5)結合しているものに（おいて）内属しているものに（おける）内属しているものに対する限定関係（saṃyuktasamavetasamavetaviśeṣaṇabhāva）。「青性という普遍は，白さを持たない」（aśuklaṃ nīlatvasāmānyam）という場合，眼と青いものには結合があり，青いものと青色には内属があり，青と青の普遍には内属があり，白さの非存在は青性を限定している。したがって，結合しているもの（青いもの）において，内属しているもの（青色）における内属しているもの（青性）の限定関係と呼ばれる。

(6)結合しているものに（おいて）内属しているものに（おける）内属しているものに対する被限定関係（saṃyuktasamavetasamavetaviśeṣyabhāva）。「青性において，白さはない」（nīlatve śauklyaṃ nāsti）という場合，眼と青いものには結合があり，青いものと青色には内属があり，青と青性には内属があり，白さの非存在は青性に限定されている。したがって，結合しているもの（青いもの）において，内属しているもの（青色）における内属しているもの（青性）の被限定関係と呼ばれる。

(7)内属しているものに対する限定関係（samavetaviśeṣaṇabhāva）。「ヴィーナー（リュートに似た楽器）の音は，強さを持たない」（atīvro vīṇāśabdo）という場合，耳とヴィーナーの音には内属があり，強さの非存在はヴィーナーの音を限定している。したがって，内属しているもの（音）における限定関係と呼ばれる。

(8)内属しているものに対する被限定関係（samavetaviśeṣyabhāva）。「ヴィー

ナーの音において，強さはない」(vīṇāśabde tīvratvaṃ nāsti) という場合，耳とヴィーナーの音には内属があり，強さの非存在はヴィーナーの音に限定されている。したがって，内属しているもの（音）における被限定関係と呼ばれる。

(9)内属しているものに（おいて）内属しているものに対する限定関係 (samavetasamavetaviśeṣaṇabhāva)。「音性は，分割の非存在を持つ」(bhedaśūnyaṃ śabdatvam) という場合，耳と音には内属があり，音と音性には内属があり，分割の非存在は音性を限定している。したがって，内属しているもの（音）において，内属しているもの（音性）の限定関係と呼ばれる。

(10)内属しているものに（おいて）内属しているものに対する被限定関係 (samavetasamavetaviśeṣyabhāva)。「音性において，分割はない」(śabdatve bhedo nāsti) という場合，耳と音には内属があり，音と音性には内属があり，分割の非存在は音性に限定されている。したがって，内属しているもの（音）において，内属しているもの（音性）の被限定関係と呼ばれる。

以上の10種類が，バーサルバニャの考える限定・被限定関係であるが，これらはすべて感官と対象との接触が前提になる認識論上の分類である。

5　ヴァーチャスパティ・ミシュラの註釈

ヴァーチャスパティ・ミシュラ (Vācaspati Miśra I, AD 976) は，『ニヤーヤ・ヴァールティカ』の註釈書である『タートパルヤ・ティーカー』(*Nyāyavārttikatātparyaṭīkā*) のなかで，ジャヤンタと同様に限定・被限定関係は必ずしも別の関係を想定しなくてよい，と言う[33]。ヴァーチャスパティはその理由を挙げて，無限遡及 (anavasthā) に陥るからと言う。この理由は，自相関係が無限遡及に陥らないために論理的に構想された関係であることを示しているのかもしれない。

6　ウダヤナの限定関係の定義

ウダヤナ（Udayana, ca. AD 1025-1100）は『タートパルヤ・ティーカー』の註釈書である『パリシュッディ』（*Nyāyavārttikatātparyaṭīkāpariśuddhi*）のなかでは，限定・被限定関係についてヴァーチャスパティと異なるような言及はしていないが[34]，『ニヤーヤ・クスマーンジャリ』（*Nyāyakusumāñjali*）のなかで，限定関係（viśeṣaṇatā）を次のように定義する[35]。

> 別の関係なしで（sambandhāntaram antareṇa），あるものに結合されるもの自身の属性が，ふたつ［の基体= 限定者と被限定者］において［存在する］。またそれ（その属性）こそが，限定されたものの認識を生起させる能力であり（viśiṣṭapratyayajananayogyatā），限定関係（viśeṣeṇatā）と言われる[36]。

限定・被限定関係は必ずしも別の関係を必要としないという考えは，既にジャヤンタに見られ，そしてヴァーチャスパティも同様に考えている。しかし，能力（yogyatā）が限定関係だという考えはウダヤナから始まる考えであろう。「地面（限定者）に，瓶の非存在（被限定者）がある」という場合，地面に限定された瓶の非存在という認識（pratyaya）を生起させる能力（yogyatā）をウダヤナは限定関係（viśeṣaṇatā）と呼ぶのである。しかし，限定・被限定関係は関係（sambandha）の定義を満たすことはできない，とミーマーンサー学派（Mimāṃsaka）によって批判され，ケーシャヴァ・ミシュラ（Keśava Miśra, ca. AD 1225-75）の『タルカ・バーシャー』（*Tarkabhāṣā*）のなかで議論されている[37]。関係（sambandha）とは，異なるふたつの基体に存在し，ひとつのものである。たとえば，ドラムとスティックの場合，これらふたつは異なるふたつの基体であり，ひとつの関係である結合がドラムとスティックそれぞれに存在する[38]。しかし，限定・被限定関係の場合，限定者と被限定者とに存在する関係はそれぞれ異なる。限定者に限定関係は存在するが，被限定者には被限定関係が存在するのであり，限定関係は存在しえない。そして，限定関係と被限定関係とのふたつの関係があることになる。従

って，限定・被限定関係もしくは限定関係を関係と見なすことはできないと批判される[39]。

7　ガンゲーシャの自相関係の定義

自相関係（svarūpasambandha）ということばは，シャシャダラ（Śaśadhara, ca. AD 1200）の『ニヤーヤ・シッダーンタ・ディーパ』（*Nyāyasiddhāntadīpa*）においてすでに見られるが[40]，ガンゲーシャの『タットヴァ・チンターマニ』（*Tattvacintāmaṇi*）のなかで初めて定義されるようになる[41]。

> 別の関係なしで，限定されたものの認識を生起させる能力が自相関係であるから（sambandhāntaram antareṇa viśiṣṭapratyayajananayogyatvasya svarūpasambandhavāt）。

ウダヤナが「限定関係」（viśeṣaṇatā）ということばを用いたのに対して，ガンゲーシャが「自相関係」（svarūpasambandha）ということばに言い換えた以外はふたつの定義はまったく同じである。限定関係であれば，限定者にのみ存在し，被限定者には存在しない。被限定者に存在するのは被限定関係であるからである。しかし，自相関係であれば，限定者と被限定者との両方に存在できる。したがって，ガンゲーシャの定義は，関係の定義を満たしている。ガウタマからウダヤナまでの古典論理学での限定・被限定関係が，内属もしくは非存在と感官との接触関係であったのに対して，新論理学での自相関係（svarūpasambandha）は，感官との接触が前提にならない。ガンゲーシャの定義は，認識論の範疇に限定されていた限定・被限定関係を論理学の範疇にまでその適用範囲を拡大する出発点であった。

8　結　　論

インド新論理学の特徴のひとつは，様々な関係によって諸概念を限定・制限することにある。そのなかで大きな役割を果たしているのが自相関係

(svarūpasambandha) である。ウッディヨータカラは内属と非存在の認識の問題において，限定・被限定関係を考え出した。それは，多くの用法を持つ自相関係の出発点であった。ジャヤンタの時代もしくは彼の時代までにはその認識論上の問題がほとんど考察されており，バーサルヴァニャは限定・被限定関係を10種類に分類した。限定・被限定関係（viśeṣaṇaviśeṣyabhāva）は，ウダヤナによって能力（yogyatā）という概念が導入された認識論上の定義を経て，ガンガーシャによって認識論から脱皮する可能性を示す論理学上の定義と新たな名称が与えられるようになった。それが，svarūpasambandhaである。

註

① *NS* 3. 2. 31 f., 3. 2. 66, 3. 2. 69, 4. 2. 21 and 4. 2. 24.

② rūparasagandhasparśāḥ saṅkhyāḥ parimāṇāni pṛthaktvaṃ saṃyogavibhāgau paratvāparatve buddhyaḥ sukhaduḥkhe icchādveṣau prayatnaś ca guṇāḥ. *VS* 1. 1. 5, p. 2.

③ しかし，KSS 版（*Upaskāra* と共に伝承された *VS* のテキスト）では次のように言われている。dharmaviśeṣaprasūtād dravyaguṇakarmasāmānyaviśeṣasamavāyānāṃ padārthānāṃ sādharmyavaidharmyābhyāṃ tattvajñānān niḥśreyasam. *VS* 1. 1. 4 ad *Upaskāra*, p. 13. このスートラは GOS 版（Candrānanda の註釈と共に伝承されたテキスト）ではスートラとして数えられていない。しかし，GOS 版でも内属（samavāya）は言及されている。saṃyogi, samavāyi, ekārthasamavāyi, virodhi ca. *VS* 3. 1. 8, p. 26.

④ dravyaguṇkarmasāmānyaviśeṣasamavāyānāṃ ṣaṣṇāṃ padārthānāṃ sādharmyavaidharmyatattvajñānaṃ niḥśreyasahetuḥ. *PBh*, p. 15.

⑤ jñānasamavetātmapradeśasannikarṣān manasaḥ smṛtyutpatter na yugapadutpattiḥ.*NS* 3. 2. 25, p.857.

⑥ asty anyad api dravyaguṇakarmasāmānyaviśeṣasamavāyāḥ prameyam. *NBh* ad*NS* 1. 1. 9, p. 183.

⑦ ātmendriyamano 'rthasannikarṣāc ca. *VS* 9. 15, p. 69.

⑧ indriyārthasannikarṣotpannaṃ jñānam avyapadeśyam avyabhicāri vyavasāyātmakaṃ pratyakṣaṃ. *NS* 1. 1. 4, p. 93.

⑨ abhāvapratyakṣe samavāyapratyakṣe cendriyasambaddhaviśeṣaṇatā hetuḥ. vaiśeṣikamate tu samavāyo na pratyakṣaḥ. *NSM*, p. 204.

「非存在を知覚する場合と内属を知覚する場合，感官と結び付いたものに対する限定関係が因である。しかし，ヴァイシェーシカ学派の考えでは，内属は知覚できない。」Cf. Athalye 1897, p. 225.

⑩ Jha 1990, pp. xxv-xxix.

⑪ Cf. Miyasaka 1983, pp. 10-13.

⑫ ふたつの実体（dravya）間の物理的結合を結合関係（saṃyogasambandha）と言う。たとえば，地面に瓶がある場合，地面と瓶はともに実体であり，ふたつの間には物理的な結合（saṃyoga）がある。Cf. Athalye 1897, pp. 164-166.

⑬ ふたつのものが，部分（avayava）と全体（avayavin），徳（guṇa）と徳の基体（guṇin），行為（kriyā）と行為の基体（kriyāvat），個物（vyakti）と類（jāti），常住な実体（nityadravya）と特殊（viśeṣa）であるとき，それらふたつの間には内属（samavāya）がある。内属はひとつであり，常住であり，離れては存在しない（ayutasiddha）。たとえば，青い瓶の場合，青と瓶との間には内属がある。Cf. Athalye, pp. 96 f.

⑭ 結合，内属以外の関係であり，かつ，ふたつのものが，基体（dharmin）と属性（dharma）である場合の関係を自相関係（svarūpasambandha）と言う。自相関係は，内属とは異なり，多数であり，常住ではない。自相関係は，認識論と論理学とのふたつの側面での関係に分けることができる。認識論の側面では自相関係は限定・被限定関係（viśeṣaṇaviśeṣyabhāva）と呼ばれ古典論理学の時代から認められており，内属（samavāya）と非存在（abhāva）を知覚する場合の感官（indriya）との接触（sannikarṣa）を指す。論理学の側面は新論理学の時代になってからの関係であり，因果関係（kāryakāraṇabhāva），所証・能証関係（sādhyasādhanabhāva），所遍・能遍関係（vyāpyavyāpakabhāva）など論理的な関係が自相関係と呼ばれるようになる。Cf. Jha 1990, pp. xi-xxxvi.

⑮ 結合，内属以外の関係であり，ふたつのもの（X, Y）の間に基体・属性関係がなく，X=Y という関係を同一関係（tādātmya），もしくは不異（abheda）とも言う。たとえば，山に煙がある場合，山（X）と煙の所有者（Y）との関係は同一関係である。Cf. Matilal 1968, pp. 45-51.

⑯ Matilal 1968, p. 37.

⑰ 本稿は，第52回日本宗教学会学術大会（北海道大学，1993年9月12日）における研究発表及び，その研究報告，山本和彦「インド新論理学における svarūpasambandha について」『宗教研究』（67-4, 1994. pp. 209-211）に基づく。

⑱ sannikarṣaḥ punaḥ ṣoḍhā bhidyate. saṃyogaḥ, saṃyuktasamavāyaḥ, saṃyuktasamavetasamavāyaḥ, samavāyaḥ, samavetasamavāyaḥ, viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaś ceti, *NV* ad *NS* 1. 1. 4, pp. 94f.

⑲ tatra cakṣur indriyam, rūpavān ghaṭādir arthaḥ. tena sannikarṣaḥ saṃyogaḥ tayor dravyasvabhāvatvāt. *Ibid.*, p. 95.

「その（結合の）場合，眼が感官であり，色を持つ瓶などが対象である。それ（瓶など）とは結合という接触がある。両方とも実体を本質としているから。」

⑳ adravyeṇa ca tadgatarūpādinā saṃyuktasamavāyaḥ, yasmāc cakṣuṣā saṃyukte dravye rūpādi varttata iti. vṛttis tu samavāyaḥ. *Loc. cit.*

「また，実体でない，それ（実体である瓶など）に存在する色とは『[感官と]

結合したものへの内属』[という接触] がある。なぜなら，眼と結合した実体に色などが存在するからである。しかるに [その場合の] 存在様式は内属である。」

㉑ rūpādivṛttinā sāmānyena saṃyuktasamavetasamavāyaḥ sannikarṣaḥ. evaṃ ghrāṇādiṣu gandhavadādidravyeṇa saṃyogaḥ. tatsamaveteṣu gandhādiṣu saṃyuktasamavāyaḥ. tadvartiṣu ca sāmānyādiṣu saṃyuktasamavetasamavāyaḥ. *Loc. cit.*

「色などに存在する普遍とは『[感官と] 結合したものに内属したものへの内属』という接触がある。同様に，鼻などには香りを持つもの（＝地）などの実体との結合があり，それ（＝地などの実体）に内属する香りなどには『結合したものへの内属』があり，それ（＝香など）に存在する普遍（＝香性）には『[感官と] 結合したものに内属したものへの内属』がある。」

㉒ śabde samavāyaḥ. *Loc. cit.*

「音声の [知覚の] 場合には内属がある。」

㉓ tadgateṣu ca sāmānyeṣu samavetasamavāyāt. *Ibid.*, p. 97.

「それ（音）に存在する普遍の場合には『[聴覚器官に] 内属したものへの内属』から [知覚がある]。」

㉔ samavāye cābhāve ca viśeṣaṇaviśeṣyabhāvād iti. *Loc. cit.*

「内属と非存在の場合には限定・被限定関係から [知覚がある]。」

㉕ Potter 1977, p. 9.

㉖ tathā, sambandhābhāvād iti yad uktam—tatra deśena saha tāvat abhāvasya viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaḥ sambandhaḥ. sa tu sambandhāntaramūla iti bhāve 'yaṃ niyamaḥ, nābhāve. yad vā bhāve 'py eṣa na niyamaḥ. na hy evaṃ bhavati yat sambaddhaṃ tat viśeṣaṇam eva. pādapīḍite, śirasi vā dhārymāṇe daṇḍe, daṇḍī iti pratyayānutpādāt. nāpy evam, yat viśeṣaṇaṃ tat sambandham eveti, samavāyasya saty api viśeṣaṇatve sambandhāntarābhāvāt. tasmāt sambandhāntararahito 'pi, pratibandha iva, vācyavācakabhāva iva, viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaḥ svatantra eva sambandhaḥ tathāpratīter avadhāryate. ubhayor ubhayātmakatvāt kadācit kasyacit tathā pratibhāsāt puruṣecchānuvartanena vyatyayapratyayasattve 'pi na doṣaḥ. tasmāt viśeṣaṇaviśeṣyabhāva eva sambandho deśena bhūtalādinā sahābhāsya. evaṃ kālenāpi saha sa eva veditavyaḥ. kriyayā kartṛsthayā vā gamanādikayā, karmasthayā vā bhedanādikayā saha saṃyogādyabhāve 'pi viśeṣanaviśeṣyabhāva eva sambandhaḥ, tadvad abhāvasyāpi bhaviṣyatīti. pratiyoginā tu saha virodho 'sya sambandhaḥ. ayam eva ca virodhārthaḥ, yad ekatrobhayor asamāveśaḥ. ataś caikavināśe na sarvavināśaḥ, ghaṭābhāvasya ghaṭaikapratiyogikatvāt. *NM*, pp. 159f.

「同様に，『関係がないから』と言われたが，その場合，まず第一に場所と非存在との関係は限定・被限定関係である。しかるに，それ（限定・被限定関係）は別の関係に基づくというこのような必然性は存在物に関してあてはまるのであり，非存在に関してはあてはまらない。もしくは，存在物に関してもこのような

必然性はない。なぜなら，［被限定者と］結び付いたものが必ずしも限定者になるとは限らないのである。杖が足で踏みつけられているとき，もしくは頭の上で支えられているとき，「杖を持つ者」という認識は起こらないからである。また必ずしも限定者が［被限定者と］結びついたものであるとは限らない。内属が限定者である場合でも，別の関係は存在しないから。それゆえ，別の関係なしでも，本質的結合（pratibandha）や表示・被表示関係のように，限定・被限定関係はまさに自立している関係であるとそのように理解されることから確定されるから。［限定者と被限定者の］両者は両者を本質とするから，時には何かあるものは人間の意欲に従ってそのように（限定者が被限定者として，被限定者が限定者として）現れるから，認識が逆であっても誤りではない。それゆえ，地面など場所と非存在との関係は限定・被限定関係だけである。同様に，時間との［関係］もそれ（限定・被限定関係）だけだと理解されるべきである。『行くこと』（gamana）など行為者に存在する行為と，もしくは『割れること』（bhedana）など行為対象に存在する［行為］と，［時間とに］結合などがなくても，限定・被限定関係こそが関係である。非存在に関してもまたそれと同様であるはずである。しかるに，反存在とこの（非存在の）関係は矛盾関係（virodha）である。また矛盾関係の意味は，ふたつのもの（非存在とその反存在）は同じ場所で共存しない，ということである。それゆえ，ひとつ［の瓶］が消滅するときに，すべて［の瓶］が消滅するわけではない。瓶の非存在とは，［特定の］ひとつの瓶を反存在として持つものであるから。」

㉗ saṃyuktaṃ samavetaṃ vā viśeṣaṇaṃ bhavati, daṇḍī devadattaḥ, nīlam utpalam iti. ataś ca na vāstavaḥ svatantra eva viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaḥ sambandhaḥ. *Ibid.*, pp. 145f.

㉘ puruṣāpekṣayā daṇḍo viśeṣaṇaṃ, rūpādyapekṣayā tu tadaiva daṇḍo viśeṣyaḥ, nīladaṇḍavān puruṣaḥ ity ādau ity apy ūhyam. *Nyāyasaurabha* ad *NM*, *Ibid.*, p. 160.

㉙ puruṣecchayā viparyasyantam apy enaṃ paśyāmaḥ. viśeṣaṇam api viśeṣyībhavati, viśeṣyam api viśeṣaṇībhavatīti kālpanika evāyaṃ sambandhaḥ, na vastudharmaḥ. *Loc. cit.*

㉚ Matilal 1968, pp. 43f., Jha 1990, pp. xxx-xxxvi, and Shukla 1992, p. 31.

㉛ Potter 1977, p. 9 and p. 399.

㉜ etatpañcavidhasaṃbaṃdhasambaddhaviśeṣaṇaviśeṣyabhāvād dṛśyābhāvasamavāyayor grahaṇaṃ. tad yathā ghaṭaśūnyaṃ bhūtalam, iha bhūtale ghaṭo nāstīti, evaṃ sarvatrodāharaṇīyam. samavāyasya tu kvacid eva grahaṇam, yathā rūpasamavāyavān ghaṭaḥ, ghaṭe rūpasamavāya iti, *NSā*, pp. 167f.

「この5種類の関係と［のいずれか］によって［感官と］結びついたものとの限定・被限定関係から，知覚可能なものの非存在と内属の認識がある。たとえば，『地面は瓶の非存在を持つ』，『地面に瓶がない』である。［非存在の知覚に関しては］いかなる場合も同様に例示しうるのである。一方，内属はある場合にのみ

知覚される。たとえば，『瓶は色との内属を持つ』，『瓶に色の内属がある』［と言う場合］である。」この『ニヤーヤ・サーラ』に対する彼の自註は以下のごとくである。

tatra saṃyuktaviśeṣaṇabhāvenābhāvasya grahaṇam—yathā ghaṭaśūnyaṃ bhūtam iti atra ghaṭābhāvaḥ indriyasaṃyuktabhūtalaviśeṣaṇatvena pratīyate, bhūtale ghaṭo nāsti ity atra viśeṣyatveneti. viśeṣaṇaviśeṣyabhāvasyāniyatatvād ubhayathāpy udāharaṇaṃ yuktam. evaṃ sarvatrodāharaṇīyam. anuṣṇo 'yaṃ sparśa iti saṃyuktasamavetaviśeṣaṇabhāvenauṣṇyābhāvo gṛhyate. toyasparśe nāsty auṣṇyam iti saṃyuktasamavetaviśeṣyabhāveneti. aśuklaṃ nīlatvasāmānyaṃ, nīlatve śauklyaṃ nāstīti saṃyuktasamavetasamavetaviśeṣaṇaviśeṣyabhāvāc chauklyābhāvo gṛhyate. atīvro vīṇāśabdo, vīṇāśabde tīvratvaṃ nāstīti samavetaviśeṣaṇaviśeṣyabhāvāt tīvratvābhāvaḥ. bhedaśūnyaṃ śabdatvaṃ, śabdatve bhedo nāstīti samavetasamavetaviśeṣaṇaviśeṣyabhāvād bhedābhāvaḥ śabdatve gṛhyate. *NBhū*, *Ibid.*, p. 168.

「ここでは，結合的限定関係によって非存在が知覚される。たとえば，『地面は，瓶の非存在を持つ』という場合，瓶の非存在は，感官と結合する地面を限定するものとして認識される。『地面において，瓶がない』という場合，［瓶の非存在は地面に］限定されるものとして認識される。限定・被限定関係は確定的ではないから，どちらの例示の仕方も可能である。［その他］いかなる場合もこのように例示しうる。『この接触は，熱くない』という『結合しているものに（おいて）内属しているものに対する限定関係』によって，熱さの非存在が認識される。『水との接触において，熱さはない』というのが『結合しているものに（おいて）内属しているものに対する被限定関係』である。『青性という普遍は，白さを持たない』，『青性において，白さはない』という『結合しているものに（おいて）内属しているものに（おける）内属しているものに対する限定・被限定関係』から白さの非存在が認識される。『ヴィーナー（リュートに似た楽器）の音は，強さを持たない』，『ヴィーナーの音において，強さはない』という『内属しているものに対する限定・被限定関係』によって，強さの非存在がある。『音性は，分割の非存在を持つ』，『音性において，分割はない』という『内属しているものに（おいて）内属しているものに対する限定・被限定関係』から，音性における分割の非存在が認識される。」

㉝ tad evam asti saṃbaddhānubhavaḥ, na cāsau saṃbandhānubhavaṃ vineti saṃbandho 'nubhūyate, sa cāyutasiddhyādisaṃpattyā samavāyaḥ, na cāsyānyaḥ samavāyo 'navasthānāt. na cendriyeṇāsya saṃyogo 'dravyatvāt. na cāsaṃbaddhasya grahaṇam, indriyāṇāṃ prāpyakāritvasamarthanāt. tasmād viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaḥ pariśiṣyate. nanv ayaṃ viśeṣaṇaviśeṣyabhāvo 'nyatra saṃbandhāntarapūrvako dṛṣṭaḥ. tat kim atra saṃbandhāntaraṃ kalpyatām ? tathā cānavasthety uktam, na cendriyāsaṃbaddhasya grahaṇam, tasmāt vinā saṃbandhāntaraṃ viśeṣaṇaviśeṣyabhāva eṣitavya iti siddham. *NVT* ad *NS*

1. 1. 4, p. 96.

「かくして，結びついたものが経験されるのであり，それは関係の経験なくしてはありえないから関係は経験される。またその［関係］は離れては存在しないことなどを備えているから内属であるが，この［内属］にとって別の内属はない。無限遡及になるからである。また感官とそれ（内属）には結合はない。［内属は］実体ではないからである。しかし［感官と］結びついていないものが知覚されるということもない。感官は［対象に］到達して作用するからである。それゆえ，限定・被限定関係が残される。［反論］この限定・被限定関係は他の場合には，別の関係に基づくことが経験されている。［答論］だからといってこの場合になぜ別の関係を想定する必要があるだろうか。またそう（別の関係を想定）すれば，無限遡及になるということは既に述べた。また，感官と結びついていないものが知覚されることはない。それゆえ，別の関係なしで，限定・被限定関係は認められるべきだということが確立する。」

㉞ *NVTP*, pp. 478-482.

㉟ asti hi śrotraśabdābhāvayoḥ svābhāviko viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaḥ. viśeṣyasyātīndriyatvāt katham aindriyakaviśiṣṭajñānaviṣayatvam, tathā viśeṣyam avyavasthāpayataś ca kathaṃ viśeṣaṇatvam iti cen na. tathā viśeṣyavyavasthāpanāyāḥ phalatvāt. na tu tad eva viśeṣaṇatvam, ātmāśrayaprasaṅgāt. viśeṣaṇabhāvena samavāyābhāvayor grahaṇaṃ, tathā grahaṇam eva ca viśeṣaṇatvam iti. *NKus*, pp. 239f.

「耳と音の非存在とには，本質的な［関係である］限定・被限定関係がある。［反論］被限定者は超感覚的なものであるから，どうして感官に限定された知識の対象が存在しようか。それゆえ，被限定者を成立させるものがないから，どうして限定関係があるのか。［答論］そうではない。被限定者を成立させるものは結果であるから，しかし，それだけが限定関係なのではない。自己依存の過失に陥るから。限定関係によって，内属と非存在とが知覚されるのである。また，そのような知覚こそが限定関係である。」

㊱ sambandhāntaram antareṇa tadupaśliṣṭasvabhāvatvam eva hi tayoḥ. saiva ca viśiṣṭapratyayajananayogyatā viśeṣaṇatety ucyate. *Idid.*, p. 241.

㊲ Shastri 1964, p. 406.

㊳ viśeṣaṇaviśeṣyabhāvaś ca sambandha eva na saṃbhavati bhinnobhayāśritaikatvābhāvāt. sambandho hi sambandhibhyāṃ bhinno bhavaty ubhayasambandhyāśritaś caikaś ca yathā bherīdaṇḍayoḥ saṃyogaḥ. *TBh*, p. 51.

「限定・被限定関係は関係（sambandha）ではありえない。異なるふたつのものに依存した単一の存在ではないからである。関係とは，ふたつの関係所有者とは異なっており，ふたつの関係項（sambandhin）に依存する単一の存在である。たとえば，ドラムとスティックの間に存在する結合のようにである。」

㊴ tad evaṃ viśeṣaṇaviśeṣyabhāvo na viśeṣaṇaviśeṣyarūpābhyāṃ bhinno, nāpy ubhayāśrito, viśeṣaṇe viśeṣaṇabhāvamātrasya sattvād viśeṣyabhāvasyābhāvād,

viśeṣye ca viśeṣyabhāvamātrasya sadbhāvād viśeṣaṇabhāvasyābhāvāt. nāpy eko, viśeṣaṇaṃ ca viśeṣyaṃ ca tayor bhāva iti dvandvāt paraḥ śrūyamāṇo bhāvaśabdaḥ pratyekam abhisaṃbaddhyate. tathā ca viśeṣanabhāvo viśeṣyabhāvaś cety āpannaṃ dvāv etāv, ekaś ca saṃbandhaḥ. tasmād viśeṣaṇaviśeṣyabhāvo na saṃbandhaḥ. *Idid.* p. 52.

「同様に，限定・被限定関係は，限定者と被限定者の性質と異ならない。また，両方に依存しているのでもない。なぜなら，限定者においては，限定関係のみが存在するのであり，被限定関係は存在しないからである。さらに，被限定者においては，被限定関係のみが存在するのであり，限定関係は存在しないからである。また，［限定・被限定関係は］ひとつではない。限定者と被限定者という「ふたつの関係」という具合に［『限定者・被限定者』という］並列複合語の後で聞かれる関係（bhāva）という言葉は，［限定者と被限定者の後に］それぞれに付けられる。それゆえ，限定関係と被限定関係というふたつのもの（関係）が得られる。しかし，関係（saṃbandha）はひとつである。それゆえ，限定・被限定関係は関係（saṃbandha）ではない。」

㊵ sā ca yady api dravyaguṇakarmasv eva samavetā tathāpi svarūpasambandhena sāmānyādiṣv api varttete tathaiva kalpanāt. *NSD*, p. 125.

㊶ sambandhāntaram antareṇa viśiṣṭapratyayajananayogyatvasya svarūpasambandhatvāt. na ca ghaṭavadbhūtalacatvarīyābhāvayoḥ parasparaṃ viśiṣṭapratyayaḥ. jñānaviṣayayoḥ samavāyasamavāyinor iva sambandhāntarābhyupagame cānavasthābhiyā tatsambandhasambandhinor api tādṛśa sambandhasvīkārād iti siddho 'tirikto 'bhāva iti tadgrāhikā viśeṣaṇateti siddham etat. *TC*, p. 764.

「別の関係なしで，限定されたものの認識を生起させる能力が自相関係であるから。また，［ある特定の］瓶のある地面と庭［にある別の特定の瓶］の非存在とのふたつに関して，相互に限定したものとして認識することはない。また知識と対象との場合や，内属と内属を持つものに，それとの場合と同様に別の関係を認めれば，無限遡及の恐れがある。そのような関係（sambandha）と関係項（sambandhin）との間にもまた同様の関係を認めることになるからである。したがって，『非存在は［基体の］個別的属性（atirikta）である』ということが成立する。『それ（非存在）を認識するものは，限定関係である』ということが，それ（非存在が個別的属性であること）によって成立する。」Cf. Matilal 1968, pp. 141f.

略号・テキスト

Āmoda

Āmoda. Śaṅkara Miśra. In the *Nyāyakusumāñjali* of Udayana. With the Commentaries, *Āmoda* of Śaṅkara Miśra, *Viveka* of Guṇānanda, *Bodhanī* of

Varadarāja, *Parimala* of Harihara Kṛpālu Dvivedī, ed. by Mahaprabhulal Goswami, Mithila Research Institute: Darbhanga, 1972.

NBh

Nyāyabhāṣya. Vātsyāyana. See *NS.*

NBhū

Nyāyabhūṣaṇa. Bhāsarvajña. See *NSā.*

NKus

Nyāyakusumāñjali. Udayana. With Four Commentaries, the *Bodhanī, Prakāśa, Prakāśikā,* and *Makaranda* by Varadarāja, Vardhamānopādhyāya, Megha Thakkura, and Rucidattopādhyāya and Notes by Sri Dharmadatta. Edited by Padmaprasada Upadhyaya and Dhundhiraja Sastri, Kashi Sanskrit Series 30, Varanasi : Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1957.

NM

Nyāyamañjarī. Jayanta Bhaṭṭa. With *Ṭippaṇi, Nyāyasaurabha* by the editor, vol. 1, edited by Varadacharya, V. K. S., Mysore : Oriental Research Insitute, 1969.

NS

Nyāyasūtra. Akṣapāda Gautama. In the *Nyāyadarśanam* with Vātsyāyana's *Bhāṣya,* Uddyotakara's *Vārttika,* Vācaspati Miśra's *Tātparyaṭīkā* and Viśvanātha's *Vṛtti.* Ed. Amarendramohan Tarkatirtha and Taranatha Nyayatarkatirtha. Calcutta Sanskrit Series 18, 29, Calcutta, 1936-44.

NSā

Nyāyasāra. Bhāsarvajña. In the *Nyāyabhūṣaṇa* edited by Swami Yogindrananda, Varanasi : Saḍdarśana Prakāśana Pratiṣṭhānam, 1968.

NSD

Nyāyasiddhāntadīpa. Śaśadhara. With *Ṭippana* by Guṇaratrasūri, ed. B. K. Matilal, Ahmedabad : L. D. Institute of Indology, 1976.

NSM

Nyāyasiddhāntamuktāvalī. Viśvanātha Pañcānan. With the Commentary *Kiraṇāvalī* by Kṛṣṇavallabhācārya, ed. by Narayanacarana Sastri & Svetavaikuntha Sastri, Kashi Sanskrit Series 212, Varanasi : Chaukhambha Sanskrit Sansthan, 1940.

NV

Nyāyavārttika, Uddyotakara. See *NS.*

NVT

Nyāyavārttikatātparyaṭīkā. Vācaspati Miśra I. See *NS.*

NVTP

Nyāyavārttikatātparyapariśuddhi. Udayana. With a gloss called *Nyāyanibandhaprakāśa* by Vardhamānopādhyāya. Edited by V. P. Dvidedin and L. S. Dravida, Calcutta :Asiatic Society, 1911-24.

PBh

Praśastapādabhāṣya (*Padārthadharmasaṅgraha*). Praśastapāda. With Commentary *Nyāyakandalī* by Śrīdhara Bhaṭṭa, along with Hindi Tran. Edited by Durgadhara Jha, Varanasi : Sampurnanand Sanskrit Vishvavidyalaya, 1977.

TBh

Tarkabhāṣā. Keśava Miśra. With the Commentary *Tarkabhāṣāprakāśikā* of Cinnambhaṭṭa, ed. by D. R Bhandarkar and Kendarnāth, Sāhityabhūṣaṇa. Second ed. Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute, 1979.

TC

Tattvacintāmaṇi. Gaṅgeśopādhyāya. With *Prakāśa* of Rucidattamiśra and *Nyāyaśikhāmaṇi* on *Prakāśa* of Rāmakṛṣṇādhvarin, vol. 1, *Pratyakṣakhaṇḍa*, edited by Tatacharya, R., Tirupati : Kendriya Sanakrit Vidyapeetha, 1973.

TS

Tarkasaṃgraha. Annaṃbhaṭṭa. With the Author's Own *Dīpikā* and Govardhana's *Nyāyabodhinī*, ed. by Yashwant Vasudev Athalye, Intr. and English Tran. of the Text by Mahadev Rajaram Bodas, 1897. Second Edition Fourth Impression, Poona : Bhandarkar Oriental Research Institute, 1988.

Upaskāra

Vaiśeṣikasūtropaskāra. Śaṅkara Miśra. With the *Prakāśikā*, Hindi Commentary by Dhundhiraja Sastri, edited by Narayana Misra, KSS 195, Varanasi : Chowkhambha Sanskrit Series Office, 1969.

VS

Vaiśeṣikasūtra. Kaṇāda. With the Commentary of Candrānanda. Edited by Jambuvijaji, GOS 136, Baroda : Oriental Insitute, 1982.

参考文献

Athalye, Y. V. and Bodas, M. R.

1897 : *Tarkasaṃgraha of Annaṃbhaṭṭa*. See *TS*.

Bhattacharyya, Janaki Vallabha

1978 : *Nyāya-Mañjarī* : The Compendium of Indian Speculative Logic, vol. 1. Delhi : Motilal Banarsidass.

Datta, Srilekha

1991 : *The Ontology of Negation*. Jadavpur Studies in Philosophy, Second Series, Calcutta : Jadavpur University.

Devadhar, C. R.

1923 : *Notes on the Nyāyasāra*. Poona.

Hota, K. N.

1992 : "The Qualifier and Qualificand Relation", *Relations in Indian Philosophy*.

Edited by V. N. Jha, Delhi : Indian Books Centre. pp. 89-98.
Jha, V. N.
1990 : *The Philosophy of Relations.* Delhi : Sri Satguru Publications.
Matilal, B. K.
1968 : *The Navya-nyāya Doctrine of Negation.* Harvard Oriental Series 46, Cambridge, Mass. : Harvard University Press.
Matsuo, Gikai （松尾義海）
1948 :『印度論理学の構造』改訂版1984京都
Miyasaka, Yuko （宮坂宥洪）
1983 :「Navyanyāya における Śābdabodhaの構造分析—Śaktivāda 研究序説—」*SAṂBHĀṢĀ,5* 名古屋大学
Potter, K. H. (ed.)
1977 : *Encyclopedia of Indian Philosophies*, vol. II, Indian Metaphysics and Epistemology : The Tradition of Nyāya-Vaiśeṣika up to Gaṅgeśa. Delhi : Motilal Banarsidass.
Shstri, Dharmendra Nath
1964 : *The Philosophy of Nyāya-Vaiśeṣika and its Conflict with the Buddhist Dignāga School.* Delhi : Bharatiya Vidya Prakashan.
Shukla, Baliram
1992 : "The History of *Svarūpasambandha*", *Relations in Indian Philosophy.* Edited by V. N. Jha, Delhi : Indian Books Centre. pp. 29-33.
Wada, Toshihiro （和田壽弘）
1988 : "Qualifier (*viśeṣaṇa*) in Navya-nyāya Philosophy", *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 37-1, Tokyo. pp. 7-13.
Yamamoto, Kazuhiko（山本和彦）
1994 :「インド新論理学における svarūpasambandhaについて」『宗教研究』67-4, pp. 209-211.

付記：本稿執筆にあたり、東京大学文学部助教授丸井浩先生より貴重なご助言を頂戴いたしました。ここに謝意を表します。